

草原がつなぐ人・自然・文化

# 全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.53 (Jan. 2023)



乙女高原草刈りボランティアで、草と一緒に楽しそうに運ばれる子ども（植原 彰氏提供）

## 新年のごあいさつ

一般社団法人全国草原再生ネットワーク  
代表理事 高橋佳孝



会員の皆さまには、健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は「未来に残したい草原の里 100 選」（主催：全国草原の里市町村連絡協議会）の第一期選定という大きなプロジェクトを完遂することができ、皆さま一人ひとりの個性と結束力に感動する年でありました。選定された 34 の草原の里にある 37 の草原を一冊にまとめた書籍出版プロジェクトも、クラウドファンディングを通じて 200 人を越える多くの方のご支援をいただき、まもなく出版の運びとなります。改めまして、この一年間の皆さまのご協力に心から感謝いたします。

既にご案内のとおり、今春に向けて第二期目の「草原の里 100 選」の募集を行っております。全国各地で草原の保全・利用・再生に努力されている草原の里から幅広く応募が集まることを期待しております。

この草原の里 100 選をはじめとする多様な活動を通じて、全国の仲間づくりを実現し、草原維持・再生の新たな拡大、発展への礎となるよう、今後も取り組みの支援や情報交換を密にしてゆく所存です。

今年は卯年です。新型コロナウイルスの収束もいまだ見通せない状況の中、まだまだ油断はできないものの、引き続き感染防止に留意しながら、より高い目標に向かって飛躍していける、そんな素晴らしい年にしていきたいと願っております。会員の皆さまには、これまで以上のご支援、ご協力を賜りますようお願いを申し上げます。新しい年が、皆さまにとって実りの多い一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。



## 未来に残したい草原の里 100 選 2022 年度の応募締め切り間近！

2022 年度の募集を、10/18 より開始しています。まだ応募をされていない地域のみなさまは、ぜひ応募下さい。未応募の地域をご存じでしたら、情報提供やチラシの配布など、ご協力をお願いいたします。

応募締め切りは 1 月 10 日ですが、応募書類の準備にもう少し時間が必要な方、書類の書き方が不明な方は、書類作成のアドバイスなども検討しますので、下記のホームページより、ご相談ください。

詳細はこちら <http://sato.sogen-net.jp/>



## 「未来に残したい草原の里 100 選」フォーラム

「未来に残したい草原の里 100 選」では、2021 年度の募集を経て、全国から 34 の草原の里が選定されました。2022 年 10 月 18 日、東京都内の東京農業大学の横井講堂にて、認定書の授与式、それを

記念した講演、選定された団体からの事例報告会などが開催されました。

6 つの草原の里からの報告の様子について、お知らせします。

### 草原の里からの事例報告

(ネットワーク事務局)

第 2 部では、今回授与式に参加された草原の里のうち、秋田県の寒風山、栃木県の土呂部、長野県の開田高原、岡山県の蒜山高原、長崎県の奥雲仙、熊本県の南阿蘇村の 6 箇所から事例報告がありました。

現在は山焼きの面積を拡大するために奔走中のことでした。また、寒風山では、「魅力ある寒風山ビジョン」を 2002 年 3 月に策定するとともに、イラストなど用いた目指すべき空間像のイメージを作成して、参画する人々のイメージの共通化が図られていました。関わる人が多いほどずれが生じやすいので、イラストによる共有化は、素晴らしい取り組みと感じました。

#### 寒風山（秋田県男鹿市）

寒風山山焼き実行委員会会長の青木満氏から、秋田県男鹿市にある寒風山の事例報告がありました。寒風山は男鹿半島の付け根にあり、山頂付近を中心に草原が広がっています。そこからは日本海をぐるりと見渡すことができ、絶景スポットとして人気があります。また、アズマギクやオキナグサなどの草原性の希少な植物や昆虫なども数多く生育・生息し、生物多様性の保全上重要なホットスポットにもなっています。しかし当地でも、山麓の集落ごとで実施されていた山焼きが、1970 年代頃から徐々に中止されて、草原の範囲は減少の一途をたどってきたそうです。草原景観を維持するために山頂部一帯は県有地化されて、公的機関による刈り払いが行われてきたものの、広大な面積を対象とするには不十分だったそうです。

#### 土呂部（栃木県日光市）

栃木県日光市の土呂部の茅場について、日光茅ボッチの会代表の飯村孝文氏から紹介がありました。同地区は関東地方有数の寒冷地で、寒い冬の朝にはダイヤモンドダストが見られるそうです。茅ボッチは刈った草を束ねたもので、秋には草原の各所に立てられて、懐かしい風景が作り出されます。しかしながら同地区でも人口減少や高齢化が進み、かつては集落の各所にみられた採草地は減少し、茅ボッチが立つ風景は著しく減っているそうです。そこで、地域の方と協力しながら、この風景を残すための取り組みを続けているとのことでした。現在、保全対象とされる採草地は約 5ha です。かつてに比べると面積は減りましたが、スズサイコ、フナバラソウ、ヒメシジミ、ウラギンヒョウモンなどの希少な草原性動植物が残っており、重要な場所であることが分



青木満氏による寒風山の報告



飯村孝文氏による土呂部の報告

かります。土呂部の草原を保全するために、灌木の伐採や刈草の搬出といった草原保全、大学や博物館と協力した動植物調査や管理試験、希少植物の増殖などの保全活動のほか、交流人口を増やすために、メープルシロップ採取体験やハーブコンサートといったイベントなどを開催しています。シロップ作りでは、地元の方が生き生きとシロップを煮詰める様子が印象的でした。

### 開田高原（長野県木曾町）

ニゴと草カップの会の服部泰英氏より、長野県木曾町の開田高原の半自然草原についてのお話がありました。開田高原には、現在でも木曾馬という在来馬が残っています。この木曾馬により育まれてきた文化を継承するために、シンポジウムやフィールドワークなどの活動が行われています。ニゴとは、冬の間の馬の飼料を作るために、刈った草を小高く積み上げたものをいい、草カップとは草刈り場のことをいうそうです。開田高原の草原には、キキョウ、オミナエシ、カワラナデシコなど、さまざまな種類の草花が残っています。その理由として、木曾馬を中心とした伝統的な管理が残ってきたことが大きいとのこと。かつて木曾馬は、労働力であり、堆肥生産者であり、現金収入源でもありました。この馬によって築き上げられてきたのが木曾馬文化だそうです。

一方、時代の変化とともに開田高原の草原も減少しており、木曾馬とともにその基盤をなす草原を残す活動が行われています。活動の紹介の中で興味深かったことは、「見えるように」「さわれるように」を意識していることでした。前者は「見える化」で、シンポジウムや企画展の開催、パンフレットの作成、後者は「さわれる化」で、調査などのフィールドワークや馬に刈草をあげる体験などでした。現状とし

て課題も抱えているとのことでしたが、木曾馬というシンボルとなる軸を中心に、さまざまな取り組みが期待できる印象を受けました。

### 蒜山高原（岡山県真庭市）

岡山県真庭市の蒜山高原の草原について、蒜山自然再生協議会の千布拓生氏より報告がありました。蒜山高原では、春の山焼き、初夏から夏の草刈り、夏の盆花採取、秋の茅刈りといった具合に、一年を通じて草原と人の関わりがありました。これによって、フサヒゲルリカミキリ、ユウスゲ、サクラソウ、キキョウなどの希少な動植物を育む草原が維持されてきました。しかしながら他地域同様、草原利用の必然性が低下し、草原が失われてきました。

そこで、蒜山地域では 2022 年 1 月に、蒜山地域固有の自然、文化、景観を次世代に引き継ぐことを目標に、自然再生推進法に基づいた協議会が設立されました。様々な取り組みが進められていますが、中でも印象に残ったのは、蒜山茅刈出荷組合による茅販売の産業化です。若手農家を中心に 2020 年に設立された組合で、農閑期の収入確保が目的のひとつでしたが、山焼きにも参加することで、草原保全に貢献しているとのことでした。2022 年 3 月には「ふるさと文化財の森」の茅材に指定されています。また新しい取り組みとして、茅が欲しいが茅場が無い地域の方に刈ってもらい、組合が乾燥から出荷までを代行することを行っています。

また草原保全の活動体験のメニューも用意されており、山焼きや草刈りのボランティア、茅刈り体験などが企画されています。自然再生の中に、一般の参加者が能動的に関わる体験型アクティビティの開発につなげたいとの話があり、従事者不足の問題解決の糸口になることが期待されます。



服部泰英氏による開田高原の報告



千布拓生氏による蒜山高原の報告



木下美津子氏による奥雲仙田代原の報告

### 奥雲仙田代原（長崎県雲仙市）

奥雲仙の自然を守る会の木下美津子氏から、長崎県雲仙市の奥雲仙田代原について話題提供がありました。奥雲仙田代原は、雲仙天草国立公園内にあり、伝統的に牛馬の放牧が行われ、草原景観が維持されてきました。春にピンク色の花をつけるミヤマキリシマは、放牧牛の不食植物であるため放牧地で群生し、美しい風景が広がっていました。一方近年では、放牧の衰退により森林への遷移が進んできたため、除伐など人の手をかけて草原景観を維持する作業が続けられています。一時期は草原が 40ha 以下までに減少しましたが、保全活動により 50ha を越えるまでに回復しています。活動にあたっては、地域住民に親しんでもらうために、講義やイベントなども行われています。

一方で、地域での認知度の低さ、活動の後継者不足といった課題もあるとのことでした。これらの課題への取り組みとして、大学の講義との連携や自然観察会の開催、SNS での発信などを行うことで、日本自然保護大賞の受賞などを受け、認知度の向上が進められています。また、地域の小学校での総合学習や植樹体験、農協や牧野組合との連携を深めることで、後継者の確保を目指しているとのことでした。

### 阿蘇地域の草原（熊本県）

南阿蘇村の吉良清一村長より、阿蘇の草原について紹介がありました。阿蘇地域には、1市3町3村、面積 2 万 ha にわたる、言わずと知れた国内最大の草原が広がっています。しかしながら、この 100 年近くで草原面積は約半分にまで減少しているそうです。草原の維持には野焼きがもっとも重要ですが、そのために必要な輪地切り（防火線づくり）を含めて、高齢化により実施困難な地域が増えています。

ところで、人口 75 万人の熊本市は、世界一の地



吉良清一氏による阿蘇地域の報告

下水都市と呼ばれるくらい、地下水の豊富な都市として知られています。阿蘇に降った雨は地中に入り、熊本市への地下水の元となっています。野焼きを止めると森林へと移り変わりますが、森は水を育むとの考えが多く住民にあるため、野焼きをして草原を維持する必要はないとの住民意識が広がっていたそうです。ところが最近の研究では、地下へ水を浸み込ませる力「水源涵養力」は、森林よりも草原の方が大きいことがわかったそうです。阿蘇カルデラから熊本都市圏への地下水の流れがあることもわかり、阿蘇の草原が広域に恩恵をもたらしていることが分かりました。阿蘇の草原がもつ公益性が示されたことで、草原保全の活動の大きな後押しになるとのこと、各地の草原保全においても有益で、また斬新な話題でした。

第 2 部の最後には、34 箇所草原の里を紹介する冊子を作成予定で、そのためのクラウドファンディングへの協力をお願い、また選考委員で全国草原再生ネットワーク代表理事の高橋佳孝氏より、2022 年度の草原 100 選の募集案内と開催へのお礼が述べられ、終了となりました。



高橋佳孝代表によるあいさつ

## 各地からの報告

### 乙女高原草刈りボランティア 2022 報告 (植原 彰：乙女高原ファンクラブ)

乙女高原（山梨県山梨市）。標高 1,700m、面積 5.4ha の草原を核とした地域です。秩父山塊の南西に位置しています。戦前は麓集落の人々が活用する採草地、戦後はスキー場として管理するために草刈りが連綿と続いてきました。2000年にスキー場が廃止され、市民・行政協働の草刈りに移行し、23年が経ちます。

コロナ禍により 2020年、2021年と一般参加者は募集しませんでした。草刈りを継続させ、今年は久しぶりに皆さんに来ていただいて草刈りをする段取りでした。例年 200人くらいが集まり、にぎやかに作業していました。ところが、予定日である 11月 23日・勤労感謝の日はいにくの雨。仕方なく前日午後中止・延期の判断をし、参加予定者に連絡しました。

草刈り日として固定している 11月 23日は晴の特異日なのか、それとも乙女の女神が私たちに味方してくれるのか、今まで草刈りが延期になったことは 2017年の一度しかありません（雪で）。ですから、私たちは延期の場合のノウハウをほとんど持ち合わせておらず、「2017年は 44人の参加だったから、それを想定して準備すればいいだろう」と高をくくっていました。いつもは「大人数・短時間」で行う作業を「少人数・短時間」で行うのですから（ちなみに、コロナ禍の 2年間は「少人数・長時間」でした）、作業の優先順位を決め、場合によっては省略する作業を選び、効率的に作業を進めるよう準備をしました。ところが、ふたを開けてみると 103人もの参加者。うれしい悲鳴でした。

多くの恩賜林保護組合・財産区の方々が刈り払い機を持って参加してくださったので、みるみるうちに草が刈られていきました。一方、レンゲツツジが優占するエリア【写真 1】は、ツツジの株を傷つけないよう鎌で刈っていただきます。手刈り作業後は、刈った草を遊歩道に敷き入れる作業をしていただきました。

戦前は、乙女高原で刈った草を現地で十分乾燥させた後に、馬の背に載せて持ち出していたことが判っています。畑で焼いて肥料にしたり、冬の農耕馬の餌に混ぜたりしたそうです。「刈った草は持ち出す



写真 1 レンゲツツジの優占エリア



写真 2 刈った草を残土処分場に撒く (2011)



写真 3 翌春には敷いた草がクッションのよう

のが乙女高原の作法」という、過去からのこのメッセージを引き継ぎ、さらに工夫を加えています。

草を草原から持ち出すにはブルーシートを使います。ブルーシート四隅のハトメに「持ち手」用の



写真4 遊歩道ロープの整理



写真6 プナじいさんにプレゼント



写真5 林道の落ち葉を集めて・・・

太い紐を通して、こぶ結びをしておきます。草をシートに載せ、場合によっては包み、紐を持って運びます。紐にこぶがあるので、握った手が滑りにくく運びやすいです。大きなビニールシートを使うと、小さな子が草の上に乗ることもでき、キャッキョと楽しそうです【表紙写真】。草原脇の車道まで運ぶと、そこに待っているのはゴミ収集車。地元のリサイクル業者が無償で提供くださいました。荷室の中に草を圧縮して詰め込むことができるので、いっぺんに大量の草が運べます。ゴミ収集車が向かう先は、近くの残土処分場。この土は琴川ダム建設に伴い、地中深くから掘ったものなので養分も埋土種子もなく、なかなか植生回復が進みません。ここに乙女高原の種子と養分（刈り草）を供給し、「第2 乙女高原を創ってしまおう」という作戦です。今年は延期になってしまったので、この作業はなしとしました【写真2】。

刈った草は持ち出すのが作法ではありますが、刈り草の1/3~1/4は土壌侵食を防ぐため、遊歩道に敷き入れています（今年に限っては全部）。コツは線路の枕木のように、遊歩道に対して横に敷くことです。はじめのうちは縦に敷いていました。土壌侵食は防

写真7 草刈りボランティアのちらし

止できましたが、歩くとツルツル滑ってしまいます。横に敷くことによって滑りにくなりました。来年の春には、クッション性の高い、足腰に優しい遊歩道になります【写真3】。

遊歩道のロープを回収し、来春、張り直すために整理して倉庫にしまいました。文章にするとこれだけです。遊歩道全部からロープを巻きながら回収し、それをもう一度ほどいて全部巻き直すなんて、すごい仕事量です【写真4】。子どもたちの参加も思いのほか多かったので、「延期の場合はなし」の予定だった「キッズボランティア～プナじいさんの根元に落ち葉のふとんをかけよう～」を急ぎよ実施しました【写真5、6】。中高生など次世代の参加が多か

ったのもうれしかったです。駅からの交通手段がない方のために無料送迎車を準備したのですが、延期日には運行できず、参加をあきらめた方もいました。残念です。

結局、作業は予定より 30 分も早く終わりました。刈ったばかりの草原に全員集合し、記念写真を撮り

ました。この写真が、来年の案内ちらしの表面を飾ります【写真 7】。

年に一度のお祭りのような「乙女高原草刈りボランティア」が終わると、乙女高原への林道は閉鎖され、乙女高原は長い冬を迎えます。

## 愛媛県四国カルスト【大野ヶ原の草原】（浅井裕史：西予市スポーツ・文化課）

このたびは、草原の里 100 選に選定いただき誠にありがとうございます。全国草原の里市町村連絡協議会他関係各位の皆様、仲間入りさせていただきましたこと御礼申し上げます。

さて、私たち愛媛県西予市にあります大野ヶ原は、愛媛県と高知県にまたがる景勝地四国カルストの中でも、人々が暮らす「生活の場」である点に特徴があります。大野ヶ原は、標高 1,100～1,400m の寒冷的な高原で、戦後 1948 年に営農が始まりました。現在も 19 戸が生活しており、主な生業は草原を利用した酪農と茅採取です。

酪農は 1959 年に導入され、広大な草原で飼料が自給でき、夏季も冷涼であることを活かしたものであり、酪農家は現在 5 戸ですが今も採草や放牧が続けられています。茅採取は、茅葺き用の茅不足を背景に近年開始したもので、10 戸が刈り取りを行っています。共有地に自生していたススキを刈り、現在は年間約 1 万束前後を協力して出荷しています。茅は全て京都や西予市の近隣集落に出荷しています。全て手刈りで牧草の手入れや採草で鎌の扱いに慣れた、年長者が収穫時に活躍しています。変遷しながら今も人と草原との関わりが続く「大野ヶ原の草原」を今後も維持管理し自然環境を守るべく草原と考えています。

さて、大野ヶ原の草原の概要と景観についてです。愛媛県と高知県の県境、四国の中央部分の四国カルストの西端にある大野ヶ原は、日本三大カルスト地形のひとつで、全長 25km、標高 1,100～1,400m と高さ・大きさともに日本一の規模を誇ります。石灰岩が点在するカルスト台地の草原では、牛たちがのんびりと草を食む光景が広がり、過去には軍の演習地として使われた経緯もあり、第二次大戦中は軍馬の放牧地になっていました。

またブナの原生林が生い茂る場所で、昭和 23 年に営農が始まってからも石灰岩の大地は水はけが良く水源確保が課題で、緑のダムとも言われる保水力

の強いブナの原生林を一部に残し、大切な水源として利用されています。

特徴的な動植物については、ススキや高山植物がみられ、日本離れした牧歌的な景色も楽しめます。大野ヶ原を含むカルスト地形の草原山間部一帯は愛媛県立自然公園に指定されており、石灰岩地帯の植物として山地の日当たりのよい草地に生える「シシウド」、小型シダ植物の「イチョウシダ」、黒紫色の斑点が入った白い花の「アケボノソウ」などがあげられます。

また、ススキ原の中に石灰岩が点在する大野ヶ原の頂上部の源氏ヶ駄馬は、平家の残党が白い石灰岩



大野ヶ原のススキ草原



大野ヶ原のカヤ刈りの様子

を白馬に乗った源氏と見間違え退却したことを地名の由来とする景勝地です。源氏ヶ駄馬には高山の日当たりのよい場所に生える「イブキトラノオ」や、山地の草原に生える「シコクフウロ」などが群生し、数は少ないが山地の林縁や林内などに生える「フシグロセンノウ」もみられます。鳥類は、開けた草原の地上で草の実などを食べて過ごす「ハギマシコ」が生息しています。

#### 大野ヶ原のカヤ刈りと茅葺茶堂の葺き替え

戦後、植林などで共同の茅場が無くなり、集落の人々は葺き替えに際し、大野ヶ原の自生するススキを刈らせてもらったという話が聞かれています。そうした地域の草原を茅場として利用してきた伝統文化を学ぶため、大野ヶ原の住民の協力により令和元年から西予市民や大学生が茅刈りを学ぶワークショップが開催されるようになりました。

#### 茅葺文化の継承

大野ヶ原の草原を生かし茅葺文化を継承する新しい試みとして、令和元年から、大野ヶ原とその近隣地区で、茅葺屋根の葺き替えと茅採取を学ぶ市民向けのワークショップを開催しました。自ら茅を採取し、植物屋根を葺くという一連の生活技術を、昔の相互扶助のように市民が実践を通して学ぶプログラ

ムであり、茅採取のワークショップの実習場所として、大野ヶ原の茅場を無償で提供してもらっています。大野ヶ原ではススキを茅として出荷する試みが先に始まっており、すでに広大な茅場があったことが、こうしたプログラムの実践を後押しすることにつながったと思います。

西予市には茶堂というお堂が点在し、そこではかつて年中行事やお接待の場として利用されていました。現在は昔のように活用されていませんが山村の辻々に存在し、その数約 170 棟ありますが、時代とともに茅葺から瓦葺き等に変化し、現在茅葺茶堂は 17 棟にまで減少しています。

この残り少ない、茅葺屋根の茶堂を残そうと西予市教育委員会、茅葺き職人、茅葺き所有者、大野ヶ原住民、大学というさまざまな関係者が協力して試行し、令和元年度から取り組み令和 4 年 12 月現在、4 棟の茶堂の茅葺き替えを完了したところです。みんなで協力して茅狩りに始まり、かつての結らしさを感じつつ毎年 1 棟の茶堂葺き替えを楽しみながら、大野ヶ原の草原を思い、また来年の茶堂茅葺き替えに思いをはせる方々が少なからずいらっしゃることをうれしく思います。

全国草原の里 100 選の一つとして選定いただいたことを誇りに今後もこのような活動を続け大野ヶ原の草原を守り活用していければと思います。



安尾茶堂での茅葺き作業



完成した安尾茶堂

## 草原をめぐる動き（2023 年 1 月～2023 年 4 月）

1/7 自然観察交流会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

1/11 田島ヶ原サクラソウ自生地の草焼き（場所：埼

玉県さいたま市桜区 桜草公園内「田島ヶ原サクラソウ自生地」、連絡先：さいたま市教育委員会文化財保護課）

- 1/15 野焼き支援ボランティア初心者研修会（場所：熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センター「草原学習館」、連絡先：公益財団法人阿蘇グリーンストック）（1/21, 1/22 にも開催）
- 1/28 若草山山焼き（場所：奈良県奈良市奈良公園内若草山一帯、連絡先：若草山焼き行事实行委員会事務局（奈良県奈良公園室））
- 1/29 第20回乙女高原フォーラム（場所：山梨県山梨市 夢わーく山梨、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 1/21 小貝川の野焼き（場所：茨城県常総市小貝川河川敷、連絡先：自然友の会（水海道市））
- 1/22 菅生沼の野焼き（場所：茨城県坂東市菅生沼、連絡先：ミュージアムパーク茨城県自然博物館）
- 1/28 あか牛を食べながら阿蘇の草原を考える（場所：熊本市上通り オモケンパーク、連絡先：公益財団法人阿蘇グリーンストック）
- 1月下旬 本州最南端の火祭り（場所：和歌山県東牟婁郡串本町潮岬望楼の芝、連絡先：串本町観光協会・串本町役場産業課）
- 1月下旬 都井岬の野焼き（場所：宮崎市串間市都井岬、連絡先：串間市観光物産協会・都井岬ビクターセンター）
- 2/4 自然観察交流会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 2/5 川内峠野焼き（場所：長崎県平戸市川内峠、連絡先：平戸市観光課）
- 2/12 大室山山焼き（場所：静岡県伊東市大室山、連絡先：大室山リフト）
- 2/19 秋吉台山焼き（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台山焼き対策協議会（美祢市農林課））
- 2月中旬 細野高原の山焼き（場所：静岡県東伊豆町、連絡先：東伊豆観光協会）
- 2月下旬 平尾台野焼き（場所：福岡県北九州市平尾台、連絡先：小倉南区役所コミュニティ支援課）
- 3/4 渡良瀬遊水地ヨシ焼き（場所：渡良瀬遊水池、連絡先：渡良瀬遊水地ヨシ焼き連絡会・一般財団法人渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団）
- 3/4 自然観察交流会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 3月上旬 ヨシ焼き（場所：山口県山口市阿知須きらら浜自然観察公園、連絡先：きらら浜自然観察公園）
- 3月中旬 曾爾高原山焼き（場所：奈良県宇陀郡曾爾村、連絡先：曾爾村観光協会）
- 3月中旬 生石高原山焼き（場所：和歌山県有田郡有田川町・紀美野町、連絡先：紀美野町役場産業課・有田川町商工観光課）
- 3月中旬 由布岳の野焼き（場所：大分県由布市湯布院町、連絡先：温湯区牧野組合・由布岳景観保全機構）
- 3月中旬 防ガツル湿原の野焼き（場所：大分県竹田市久住町、連絡先：坊ガツル野焼き実行委員会・公益財団法人九電みらい財団）
- 3月中旬 千俵蒔山の野焼き（場所：長崎県対馬市上県町、連絡先：（対馬市上県行政サービスセンター））
- 3月中旬～下旬 飯田高原野焼き（場所：大分県玖珠郡九重町、連絡先：飯田高原野焼き実行委員会・九重町商工観光・自然環境課）
- 3月下旬 砥峰高原山焼き（場所：兵庫県神河町連絡先：とのみね高原山焼き実行委員会）
- 3月下旬 三瓶山西の原火入れ（場所：島根県大田市三瓶山、連絡先：大田市役所）
- 3月下旬 塩塚高原野焼き（場所：愛媛県四国中央市・徳島県三好市、連絡先：四国中央市観光協会・三好市役所）
- 4月上旬 扇山火まつり（場所：大分県別府市扇山、連絡先：別府八湯まつり実行委員会）
- 4月中旬 寒風山山焼き（場所：秋田県男鹿市、連絡先：男鹿市観光課）
- 4月中旬 雲月山の山焼き（場所：広島県北広島町連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 4月下旬 小清水原生花園火入れ（野焼き）（場所：北海道小清水町、連絡先：小清水原生花園風景回復対策協議会・小清水町産業課商工観光係）

※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

## 全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 53 2023年1月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局  
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14  
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】「未来に残したい草原の里100選」の2022年度の募集が行われています。2021年度に選定された地域は34地区ですが、全国にはもっと多くの草原があり、なるべく多くの草原に光を当てたいと考えています。会員のみなさまには、応募への協力を頂けると幸いです。